Catwalk

[特集]

“ハイ·ライフ”自由に凶暴に。

まつもと市民·芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
02
2024
Winter

次期芸術監督［舞踊部門］倉田 翠が語る

2023年6月に発表されたまつもと市民芸術館「芸術監督団」のひとりとして、令和6年度より舞踊部門を担当する倉田翠。コンテンポラリーダンスの踊り手・演出家・振付家として、ダンスの枠を超えた自由かつ本質的な作品を発表してきた。まつもと市民芸術館をどのように〝ひらいていく〟のか。現在は参与という肩書で京都から松本に足しげく通う倉田の、兆し始めた思いを聞いた。

INTERVIEW

劇場と人の距離が近い松本で身体と舞台が持つ力を共有したい

——松本の街の印象はいかがですか？

こんなことを言うとリップサービスみたいに聞こえるかもしれませんが、とてもいいんです！ 今日はたまたま劇場の向かいのお店に寄ったのでご挨拶をしたら、奥さんが「私、市民オペラに出るんですよ」と話してくれました。街の人が劇場のことをよく知っているのがとても新鮮です。「記者会見、見ましたよ」と声をかけられて驚いたこともありました。劇場と人の距離がとても近くて、それがすごくうれしいですね。

——芸術監督団には、芸術館がまちにひらいていくための役割が期待されています。

私に関しては、みなさん「ダンスの人が来よったな」という印象はあると思います。ダンスはよく分からないという人の〝とっかかり〟になれるようなことができればいいですね。でもね、私もコンテンポラリーダンスがいまだによく分からないんですよ。舞台とは作品とは何かと考えると、ダンサーでも俳優でもそうでない人でも誰でもいいんですが、舞台に立った時のその人の身体性が私にとってはすべてです。言葉で理解するというわけではなく、身体で判断する。そこを感じられるような体験をしてもらうにはどうしたらいいか、どういう作品に触れてもらえばダンスに近寄りやすくなるか、今すごく考えています。

それから、ひらいていって、人に来てほしいと思っているのは、たとえば喫茶店や博物館といった街のほかの場所も同じではないでしょうか。そういった場所とも繋がってエネルギーが合わさると、劇場だけではできないひらき方ができるんじゃないかなという予感があります。

——倉田さんにとってのダンスとは、舞台とはどういうものでしょうか。

私にとってのダンスは、足が高く上がる、きれいに回れるといったことではありません。作品をつくる時、ダンサーであってもしゃべってもらったほうが面白いと感じたら、そちらを取ります。演出や振付がその人の良さを消してしまうことは多々あるので、その人をまず見て感じたことに正直でいたい。それに、最初に舞台に「在る状態」ができていないと、踊りが運動やダンスに希望や必要性を感じているからかもしれませんが……。

次の新作は俳優、ダンサー、現代アートの作家など、さまざまな分野で活動する人たちと、ジャンル分けできないような私らしい作品をつくりたいと思っています。あとは、木ノ下さんが仰っていた〝ひらかれた〟ではなく〝ひらいていく〟という進行形で考えた時に、これまで劇場から焦点が当たりづらかった市民の人たちと、松本でやる意味があるクリエイションをしたいと思っています。それは、出演者が葛藤する時間が持てるくらいの十分な長さで、丁寧につくりたいですね。作品づくりは楽しいだけではなくて、苦しさもあります。一般の人であってもそこを通過して舞台に立ってほしいと思っています。舞台にしかできないことを、市民の方々と一緒に味わいたいですね。

作業になってしまうんですよ。大学時代、恩師である長野県出身の舞踊家・山田せつ子さんに、「あなたは誰なのか」「ここにどう立つのか」ということをずっと問われ続けました。その時から、自分にとって「これは絶対的に踊りだ」というものを探し続けて今に至っている気がします。

——芸術監督団の木ノ下裕一さん、石丸幹二さんとはどんな風に関わっていらっしゃいますか？

オンラインミーティングやLINEでやりとりしたり、それぞれの作品を見に行ったりしています。やってきたことも方向性も3人とも違うんですが、違いを否定せずキャッチする力があるのがとてもいいんです。先日は石丸さんのミュージカルを見て、本当に感動して泣きました。プロフェッショナルだと思いました。監督同士も、おそらくお互いに影響し合って少しずつひらいてきているのではないでしょうか。そんな3人が、全く違うアクセスの仕方をしていくうちに、いつの間にか劇場がひらいていくのかもしれません。

——来年4月からいよいよ芸術監督としての活動が本格化しますが、どのような構想を温めていらっしゃるのでしょうか。

まずは、市民の方とご一緒することを期待されていますので、その期待に大いに応えたいです。地域の人と出会えるワークショップなど、なんぼでもやりたいですという気持ちです。そして、自己紹介になる作品を松本でつくりたいですね。私の作品は分かりやすく言うと演劇に半分足を突っ込んでいて、ダンスかダンスじゃないか分からないようなものが多いんです。それでもダンスと言い張っているのは、

akakilike『家族写真』 photo:Kai Maetani

「akakilike（アカキライク）」主宰。3歳よりクラシックバレエ、モダンバレエを始める。京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）映像・舞台芸術学科を卒業し、現在は京都を拠点に演出家・振付家・ダンサーとして活動。作品ごとに自身や他者と向かい合ってクリエイションを行い、ダンスの可能性を探求している。2016年から倉田翠とテクニカルスタッフのみの団体「akakilike」をスタート。ダンサーや俳優だけでなく、薬物依存症リハビリ施設「京都ダルク」のメンバーや、東京中心部のオフィス街で働く人々など、市井を生きる人とも意欲的な新作を制作している。2024年1月18日（木）～1月21日（日）ロームシアター京都にて、akakilike『家族写真』を上演。

Interview&Text : Kyoko Kurimoto Photo : Takeshi Yamada

REVIEW

まつもと市民芸術館プロデュース　『ハイ・ライフ』

CAST

ディック　東出昌大
ドニー　尾上寛之
バグ　阿部亮平
ビリー　小日向星一

作：リー・マクドゥーガル
翻訳：吉原豊司
演出：日澤雄介
（劇団チョコレートケーキ）
美術：長田佳代子
照明：齋藤茂男
音響：佐久間修一
衣裳：ゴウダアツコ
演出助手：平戸麻衣
舞台監督：福澤諭志
プロデューサー：小川知子

2023月11月23日（木・祝）～11月26日（日）
まつもと市民芸術館 実験劇場
2023年12月1日（金）～12月6日（水）
吉祥寺シアター

空き缶や雑誌とともに犯罪の匂いまでが散乱する一室。ここはジャンキーたちの巣窟。自由に、凶暴にいられる場所だ。白い柱に巻き付く管は、剥き出しの血管のよう。流れるのは冷酷さがたぎった赤い血か。いくつかの照明がゆっくり点滅。それはジャンキーたちを監視しているのか、3方から舞台を囲む観客の鼓動といつの間にか呼応して事件の共犯者として巻き込もうとしているのか。よどむ空気が客席にあふれ出し、まとわりつく。

リーダー格のディックは、時にはしゃぐように、時に冷徹に仲間と接する。ある日、ディックは刑務所を出たばかりの狂犬バグ、薬中で身体中ボロボロなコソ泥ドニー、女に貢がせてばかりのビリーに一攫千金を狙った銀行強盗を提案する。バグは刑務所に入った経験がないビリーはオキテを知らないと拒絶し、ビリーも何かとバグを挑発するが、底辺の生活から抜け出すという目的のために3人はディックの計画にのることに…。

ディックは東出昌大が演じるとその存在感もあり、相手に威圧を与えている。不憫さが漂うドニーを演じる尾上寛之は役にリアルさを感じさせる。阿部亮平演じるバグはワルが服を着たような凶暴さを振りかざす。小日向星一演じるビリーは母性本能をくすぐるかのような容姿の陰にクレバーさをのぞかせる。

ドニーがキャッシュカードを盗んで用意した大金を持ち、ビリーが銀行のカウンターで「ATMが壊れたのか引き出そうとした金額の10倍が出てきた」と申告する。そして駆けつけた修理屋ともに銀行員のふりをしたディックとバグがATM機械の裏に紛れ込み、修理屋を襲って根こそぎ大金を奪取する――これが計画の筋書きだ。だが、盗難車の中でいつまでも現れない修理屋を待ち続けるうち、彼らの緊張と不穏はマックスに。バグとビリーは罵り合いを始め、ビリーが取り出したナイフをバグが奪って逆にビリーを刺してしまう。ディックはバグに、バグに殴られ気絶したドニーの手にナイフを握らせるように指示をし、二人はその場を去る。計画はオジャンだ。

数カ月後、再会するディックとバグ。あっけらかんと笑顔で酒を酌み交わす。観客の心に湧き上がったのは、彼らが修羅場をすり抜けて生き伸びているハラハラ感か、彼らの行いを否定する正義か？　複雑な感情の置き場を慌てて探してしまうのは、我々が劇世界にのめり込んだためだ。そんなことをよそに彼らの日常は変わらず続く。これからもきっとドラッグ、酒、タバコに明け暮れ、また新たな犯罪の計画を練っていくだろう。今もどこかで誰かがディックとバグらのように生き生きと堕ちていく。

3　2　1

6　5　4

1.ディック（背中、東出昌大）が差し出すドラッグを欲するドニー（尾上寛之）2.アジトでくつろぐディック（左、東出昌大）とバグ（右、阿部亮平）3.リーダー格のディック（東出昌大）は子どものようにはしゃぐ一方、時に冷酷な表情を見せる　4.ビリー（左、小日向星一）に挑発されて詰め寄るバグ（右、阿部亮平）をなだめるディック（中、東出昌大）5.結局は利用し合っていたビリー（右、小日向星一）とディック（左、東出昌大）6.バグ（左、阿部亮平）の足にドラッグを打つディック（右、東出昌大）

松本市立博物館開館特別展「まつもと博覧会」
関連企画イベント

『サムライたちの職員会議』

明治時代、松本城には存続の危機が何度かありました。最大の危機は、1872年に競売にかけられ、309両１分余で落札されてしまった事件でしょう。これを止めたのが啓蒙家の市川量造です。彼は松本城を会場に博覧会の開催を提案、それまで立ち入ることが許されなかった庶民にも開放して、その収益で松本城を買い戻すというのです。そして1873年11月に開催された「松本博覧会」は耳目を集め、見事に松本城を買い戻すことに成功したのです。史実です。

2023年11月、この松本博覧会をオマージュした開館特別展「まつもと博覧会」開催中の“新装”松本市立博物館に、なんと架空の量造の子孫が現れました。松本市立博物館と芸術館のコラボレーション企画として上演された『サムライたちの職員会議』の物語の中でのこと。博物館２階の図書情報室を利用した特設会場は、とある高校の会議室に変貌し、「松本天守閣保存会」に所属する教員たちの臨時職員会議が開かれることに。松本城を維持管理する予算が街にはなく、前回の会議では「松本城を売ってしまおう」という意見まで飛び出す始末。松本城を守りたい市川副校長と石川教頭は売却派の３先生を待ち受けます。とは言え、売却派は菅原文太の似顔絵を描き続ける豊吉先生、身体をくねくね粘着質な話し方をする徳光先生、歩くのがカタツムリのように遅い小田先生と曲者ぞろい。「マンションにして家賃をとれば」など乱暴な意見が飛び交う中、会議は脱線の連続。さらに職員室から呼び出されたりと、腹痛でトイレに駆け込んだりしながら、物語は苦笑も交えた爆笑キャラクター合戦の様相を呈し、議題はどこへやら。そんな中、突然、豊吉先生が郷里の福島県への思いを語り、退職の意思を明らかにし、しんみり――。

作・演出は松本市出身で、今年の４月から福島県の高校で教えている髙山さなえ。ガラス張りのエレベーターや１階への階段など博物館の構造を紹介するようにダイナミックに利用し、戻らぬ先生を迎えに行ったり、そうとは知らずに戻ってくる先生とのすれ違いを描きます。これはコメディの常套手段。普段の芸術館とはちょっぴり雰囲気が違うお客様たちの大笑いを誘いました。明治の博覧会に演劇もあったということで実現した、『サムライたちの職員会議』。特別展「まつもと博覧会」に笑いという彩りを添えました。

REVIEW

作・演出：髙山さなえ

市川副校長　武居卓
石川教頭　草光純太
徳光先生　前田斜め
豊吉先生　下地尚子
小田先生　深沢豊

photo : Atsutoshi Shimosaka

レアでスペシャルな文楽をオールスターで上演
初体験でも十分楽しめる解説付き
まずは観てみよう！

竹本錣太夫（左）と鶴澤藤蔵

まつもと市民芸術館で2月25日に上演される人形浄瑠璃文楽『木下蔭狭間合戦「竹中砦の段」』は、かつては頻繁に上演された演目です。技術的なハードルの高さなどから、1934年以来途絶えていましたが、2021年に京都で復活上演されました。それを成し遂げたのが、松本公演にやってくる文楽界のオールスターの布陣です。文楽初体験でも楽しめる入門解説、アフタートークと、贅沢な3部構成のプログラム。「文楽の魅力がぎっしり詰まっている」と木ノ下裕一参与が熱く紹介してくれました。文楽は難しそう？なんて尻込みしていられません。

（前売情報は16ページ）

太夫・三味線・人形が一体となった総合芸術である人形浄瑠璃文楽は、江戸時代に成立した、世界的にも稀有な三人遣いの人形劇。2003年にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。つい人形ばかりに注目しがちですが、それではもったいないのです。

「人形はもともと東アジアから伝わった文化で傀儡をルーツに持つと言われています。太夫の語りは、琵琶法師などが発展させてきた日本固有の芸能。三味線は諸説ありますが、戦国時代から江戸前期にかけて渡来し、広まった楽器です。ルーツがまったく違う、混じり合うはずのない3つの芸能が日本で出会って文楽になった。お互いが瞬間瞬間で主導権を奪い合い、火花を散らし合う、それが文楽の魅力」（以下、「」は木ノ下の発言）

もちろん人形に魅了されてもいいし、上手の床（太夫と三味線のいる場所）の前のかぶりつきで語りや三味線に耳を集中させるもよし。自分の「好き」に合わせて多様な楽しみ方ができる。役者に集中する歌舞伎と比べても観る側の自由度は高いのだそう。

本作は、桶狭間の戦（1560年）を題材に、斎藤義龍の名軍師・竹中官兵衛と、官兵衛の娘・千里と恋仲に落ちた敵・小田春永の家臣・左枝犬清をめぐる、謀略と人情が入り乱れた物語。

「砦を舞台に戦の始まりから終わりまでが描かれます。官兵衛側と春永側が策を練り合い、だましだまされを繰り返す一種の情報戦で、戦況が二転三転する起伏に富んだ展開。戦況を報告する注進の人形は派手なボディランゲージで勢いがあるし、戦を再現するのでテンションも高い。また同時にホームドラマでもあって、千里と犬清が敵味方に分かれるのですが、若い二人の間には子どもも生まれている。拮抗する二つのドラマの間で、軍師、そして父や祖父として揺れ動く官兵衛の心情は特に見どころです」

稀有なオールスターの揃い踏み

復活後、まだ文楽の本公演でも上演されていない本作。なかなか上演されない理由の一つは前述の通りテクニックが必要な大曲ゆえと言われています。

「太夫が長尺の一段を始まりから終わりまで一人で語り抜きます。もう全速力のマラソンのようです。今回は竹本錣太夫さんが語ってくださいます。全編を通してテンションの高い一幕ですし、主な登場人物すべてに見せ場や愁嘆がある。語りの見事さも大きな眼目の一つです。ただ錣太夫さん自身もこの先いつまでできるかとおっしゃるくらいの大変さです。三味線の鶴澤藤蔵さんは2003年に早稲田大学演劇研究センターで素浄瑠璃（語りと三味線だけでの上演）として復曲したときから携わってらっしゃる。今回の人形付きでの完全上演は、早稲田の研究と復曲の恩恵に浴して実現しています。藤蔵さんの三味線はなんといってもパワフルでスケールが大きい。気迫の三味線を披露してくださいます」

エネルギーにあふれた太夫と三味線はそれぞれに登場するキャラクターのセリフから情景・心理までを表現します。

そして人形遣いの桐竹勘十郎さんと吉田玉男さんはともに人間国宝という豪華な顔合わせ。

「主人公官兵衛を遣う（人形を操作する）勘十郎さんはこの作品の演出者であり、人形の動き、衣裳に至るまでをつくり上げてくださいました。勘十郎さんの人形のすばらしさについては、もう申すまでもないでしょう。緻密であり、情がたっぷりこもっている。玉男さんはじめ現代の文楽を代表する人形遣いさんが集結してくださってますから、まずは一度ご覧くださいと言うよりほかはありません。玉男さんは官兵衛と敵対する春永です。人間国宝お二人の共演も見逃せませんね」

この復活上演に関わった経験から木ノ下はさらに言葉を続けます。

「改めて文楽は立ち位置で見せる芸能だと実感しました。人形だから首の傾きで表情が違って見えるのですが、基本的には表情は変わらない。けれど人形同士の距離感によって近ければ親密に、遠ければ緊張関係が増して見える。上下に並ぶと上の方が力があるように見えたりと、立ち位置一つで豊かな関係性が浮かび上がります。2021年の初演時では、勘十郎さんが立ち位置を練ってくださり、私も時々意見を言ったり、一緒に考えたりもしました」

「これぞ文楽」とも言える演目に文楽を初めて体験する方はハードルを感じるかもしれませんが、解説付きなので心配ありません。「これを観ればどんな文楽も怖くない。置いてきぼりにはしません」と木ノ下。曰く「噛めば噛むほど味わいのある高級なお肉」のような味わいを一緒に楽しみましょう。豪華な布陣の稀有な演目、決してお見逃しなく。

次期芸術監督団 団長／
芸術監督［演劇部門］
木ノ下裕一

人形浄瑠璃文楽『木下蔭狭間合戦「竹中砦の段」』（ロームシアター京都）撮影：桂秀也

桐竹勘十郎

“すべての人にひらいていく劇場”に向けた第一歩

能のメソッドを使った作品を創作している下掛宝生流の能楽師、安田登。全国に引っ張りだこの浪曲師、玉川奈々福。千数百年に及ぶ日本の琵琶の音色を現代に響かせたいと活動する琵琶奏者、塩高和之。『能でよむ〜漱石と八雲〜』では、夏目漱石と小泉八雲の名作を、３者の卓越した表現によって幽遠かつ優婉に編み上げた。着物姿のお客様が多数来場するなど華やいだ雰囲気に彩られた満員の客席。実は、視覚、聴覚に障がいのある方にも楽しんでいただけるよう、工夫を凝らして臨んだ催しでもあった。

ATTEMPT

Photo : Takeshi Yamada

公演は、開演前の木ノ下裕一参与による舞台空間の説明から始まった。古典芸能用に舞台にはヒノキの所作台が設置されていること、そこに上がるには足袋を履くルールがあることなどを説明し、バンバンと足拍子をしてみせた。乾いた音がホールに響き渡る。続いて舞台の広さを伝えるため上手から下手まで、舞台の前面から奥まで何歩で歩けるかやってみせ、ポイントごとに手を叩いた。

幕開け。今度は木ノ下、安田が登場し、まずは能から見た漱石と八雲の作品について、熊本の第五高等学校、東京帝国大学と八雲を追うように赴任した漱石だったがついぞ出会えなかった奇縁について解説。

そして第一部は漱石原作の2作品を披露。『夢十夜』の「第三夜」は盲目の息子を背負って捨てようとした男が、ある杉の木のもとで、息子から自分は100年前お前に殺された盲人だと告白される物語。奈々福の三味線、塩高の琵琶の迫力あるセッションが際立った。『吾輩は猫である』もちの段は、雑煮を食べた猫の吾輩が歯に絡みついて取れない餅に四苦八苦する。安田演じるコミカルでキュートな猫が印象的だ。

第二部は八雲の『耳なし芳一』。平家の最期を描いた「壇ノ浦の戦」を見事に語る琵琶法師の芳一が平家の霊に取り憑かれてしまう。安田、奈々福の語り、そして芳一が乗り移ったかのような琵琶の音色が代わる代わるバトンを渡し合い、物語をつづった。

本物に出会うことで心がゆさぶられ、豊かになる

本企画は、芸術館として視覚、聴覚に障がいのある方にも楽しんでいただくための工夫にも取り組んだ。これまでも車椅子などのお客様が公演を観にきてくださることはあったが、木ノ下参与のもと、積極的に障がいのある皆さんにも劇場を「ひらいていく」ことを目指した第一歩だ。木ノ下は事前に安田とともに市内の盲・ろう学校を訪れた。当日は聞こえない方のため解説には手話通訳、劇中はポータブル字幕機で対応。見えない方には前述の解説の時間を設けた。聴覚に障がいのある方2名、視覚に障がいのある方3名が参加した。

今回は、網膜色素変性症で20代半ばで視力を失った中田芳典さんに公演の感想を伺った。中田さんはバンドでドラムを担当したり、落語に挑戦したりとアクティブだ。

「古典芸能は初めてでしたが、言葉、話芸の素晴らしさに感動しました。ストレートに入ってくるし、物語の深さが伝わってきた。三味線と琵琶の音がすごく合うというのは発見です。生はいいですね、直接染み入ってきますから」

また鑑賞支援については、こんな感想をいただいた。

「最初の空間の解説は素晴らしかった。あのおかげでうんとイメージが湧きました。舞台の広さが言葉に加え、手を叩いたり足を踏み鳴らしたりと耳から入ってきた情報のおかげでよくわかった。すごく考えてくださっていると思いました。できれば演者の方が右に回った、こういう格好をしている、顔はこういう表情だとか、そういうことは見えない我々には想像がつかないから音声ガイドがあるとうれしいです」

中田さんもそうだが、視覚に障がいのある方は、パートナーの方がポイント、ポイントで耳元で説明をしていらっしゃるのが印象的だった。

「障がいを持つとどうしても外に出なくなります。でも本物と出会うことは大事で、心がゆさぶられるし、豊かになります。ただ、いろいろとチャレンジしたいけれど情報を手に入れるのが難しい。芸術館でチラシを調べたり、インターネットで調べたりすればいいんだけど、そこは僕自身もっともっと勉強したいですね」

そもそもどんな催しがあるか、その情報をどういう手段で届けるかは障がい特性によって違ってくる。その際にどんな鑑賞支援が用意されているかを普段のチラシなどで明確にすることも、障がいのある皆さんとつながるためには重要な要素。当事者の皆さんの言葉は貴重だ。

芸術館では、これからも障がいのある方にも「ひらいていく」機会を実践していく。

中田芳典さん

松本市在住。26歳のころに失明。2016年より「蒼星バンド」を結成し、定期的にライブを実施。リーダーとしてドラマー、ボーカルを担当。講演活動のほか、あおぼし亭よし吉の名で落語でも高齢者施設などを訪問している。

右ページ上／「耳なし芳一」より、左から安田登、塩高和之、玉川奈々福
下／公演の最後に、客席も一緒に、手のひらをヒラヒラさせる手話の拍手をやり取りした

楽しい演劇、出前します

～芸術館アウトリーチ事業～

OUT REACH

「アウトリーチ」という言葉を聞いたことはありますか？　芸術家や文化施設が皆さんのもとに出向いて公演やワークショップを行う取り組みです。アウトリーチによって「演劇って楽しい」「また見たい」などと思ってくださる方を増やしたり、文化芸術が社会に果たす役割を広げたりしながら、地域の文化芸術をより豊かなものにしていくことを目的にしています。芸術館では劇団「シアターランポン」とのダッグで、『カメレオンの陽気なキャラバン』をお届けする取り組みを始めました。

『カメレオンの陽気なキャラバン』は、アウトリーチ事業のためにシアターランポンに制作委託した作品です。シアターランポンは、芸術館を拠点に活動していたTCアルプの有志が2023年4月に旗揚げした劇団です。『カメレオン～』は、テーマを出して話し合い、台本を書き、即興で試しながら気軽に楽しめることを目指して創作されました。「昨夜見た夢を教えてと迫られる男」「ゴリラに突然遭遇した男」「もしも桃太郎がピーチ太郎という名前だったら」「宛名のない手紙を届けようと頑張る郵便屋」など、どこかにありそう？な話を集めたオムニバスです。メンバーは観客の目の前で素早く着替え、赤ちゃんやお年寄り、動物などさまざまな役を演じていきます。照明や音響なども交代で務めます。

シアターランポンの草光純太、荒井正樹、深沢豊、堀田康平に作品のこと、アウトリーチのことを聞きました。

「小さなお子さんにも見てもらえるように、暗転や大きな音は控えようなど何度も相談しながらつくりました。一つ一つの話を集中して見られるように、目先を変えた楽しい物語で構成されています」（荒井）

この作品は2023年6月に芸術館でお披露目し、これから市内の児童館や公民館などを中心に上演していきます。

「才教学園で上演した時、ある女の子がお家で芝居の一場面を再現し、こうだった、ああだったと話してくれたらしいんです。彼女のお兄さんはアウトリーチの日は体調が悪く欠席だったそうですが、すごく興味を持ってくれたとかで、お母さんから連絡をいただきました。これがアウトリーチの可能性の一つですね。僕らが蒔いた演劇の種がちょっとずつでもつながっていくのはうれしい」（堀田）

この1月14日（日）には、アウトリーチのためのプレゼンも兼ねて、一般の皆さんにも観ていただく機会を設けています。

演劇と出会う、人と出会う機会をつくる

深沢と堀田は、芸術館主催の「まつもと演劇工場」でもアウトリーチを数多く経験しています。

「演劇工場では普段は劇場に来られない、演劇に触れていない方々のもとに届けようよということで、四賀地区、奈川地区などに出かけたのですが、地域のお年寄りがたくさん観にきてくださったんです。あるおばあちゃんから人生で初めての観劇だったと伺い、とてもうれしい気持ちになりました」（堀田）

「そう、もしかしたら最初で最後の観劇かもしれないと考えると、しっかりやらなければと思いました。同時に演劇を届ける意義を感じました。高齢の方々は回覧板や、これからお芝居をやりますという町内放送によって訪れてくださった。演劇はそんなふうに気軽に見られるものでありたいですね」（深沢）

アウトリーチは「ひらいていく」芸術館の取り組みの一つです。ランポンのメンバーもこんな思いを持っています。

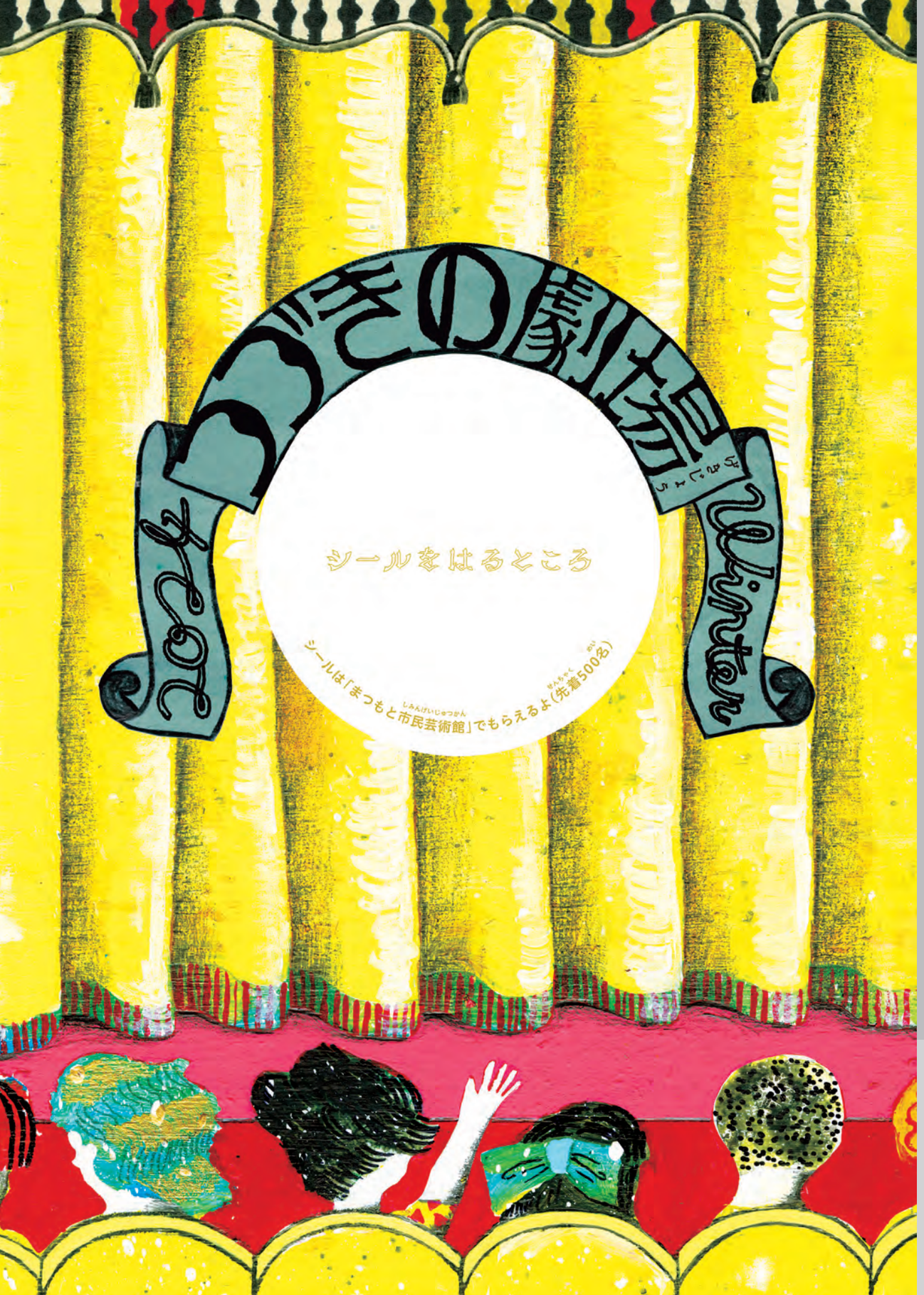
「一生演劇に触れない、小学校の鑑賞教室で観ただけという方がおそらく大半かもしれません。けれど日常の中で気軽に触れていただきたいし、演劇への敷居を低くできるのがアウトリーチの意義。観劇という行為は他人の頭の中を覗くようなものです。皆さんの中に今までとは違う考えが生まれたり、日常が少し違って見えたりする、そんな小さな変化が起きるといいですね。また演劇に触れてこなかった方々が僕らの芝居をどう感じてくださるのか、感想を伺うことは僕らの創作にとっても大きな刺激になります」（草光）

前列左から荒井正樹、武居卓、深沢豊
後列左から堀田康平、草光純太、細川貴司、下地尚子

「生きていくこと、子どもを育てること、日々の生活を送るだけでも大変ですが、そんな中で演劇と出会うことで生活にほんの少し彩りが添えられるかもしれません。その可能性があるならば僕たちは劇場を飛び出し、皆さんのもとに伺いたい。家族でお芝居のことを話題にしたり、少しでも日常の潤いになるならアウトリーチをする意味は大いにある。演劇に出会ったお子さんが、何年後かに劇場に来てくれたらいいな、そんな感覚でやるぐらいがちょうどいいのかなと思います」（荒井）

『カメレオン～』にご興味のある方々は芸術館に気軽にお問い合わせください。皆様のもとに楽しい演劇をお届けいたします。

Stage Photo : Ayano Honda



公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

Information

SIDE A B

チケット発売中

木ノ下裕一による解説付き！ 人形浄瑠璃 文楽

『木下蔭狭間合戦「竹中砦の段」』

2月25日（日）14：00　主ホール

第一部：木ノ下裕一による文楽入門
ナビゲーター：木ノ下裕一
（木ノ下歌舞伎主宰、まつもと市民芸術館参与）
第二部：人形浄瑠璃文楽
『木下蔭狭間合戦「竹中砦の段」』
出演：〈浄瑠璃〉竹本錣太夫
〈三味線〉鶴澤藤蔵
〈人形遣い〉桐竹勘十郎（人間国宝）
吉田玉男（人間国宝）他のみなさん
第三部：アフタートーク
出演：
竹本錣太夫
鶴澤藤蔵
桐竹勘十郎
木ノ下裕一

料金：全席指定（税込）
一般 ¥4,500／U25 ¥1,500

※未就学児入場不可
※U25チケットは枚数限定、前売のみ。また当日年齢確認証提示。

ロームシアター京都にて 撮影：桂秀也

2月3日発売

チャオ！バンビーニ2024冬
『ローリーの怪奇骨董お話し箱』

3月23日（土）13:00／16:30
実験劇場

出演：ROLLY（ローリー）

料金：整理番号付自由席（税込）
一般 ¥3,000／U25 ¥1,000

※3歳以下入場不可
※U25チケットは当日年齢確認証提示。

おやこ券 ¥3,500（正価 ¥4,000のところ）

※前売券及びまつもと市民芸術館チケットセンターのみ取扱
※おやこ券は、一般：1名＋U25：1名のペア券です
※予定枚数が終了した時点で販売終了となります

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の新しい広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報、『ねこあるき』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるようになっています。またCatwalk（＝キャットウォーク）とは、劇場のステージや客席の上のスタッフしか歩くことのない細い回廊のことを言います。

『Catwalk／ねこあるき』Vol.2

2024年１月４日発行

発行　まつもと市民芸術館
〒390-0815
長野県松本市深志３丁目10番１号
Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830
E-mail mpac@mpac.jp
URL https://www.mpac.jp

編集　いまいこういち（『engawa』）
デザイン　清水貴栄・小林慎太郎
印刷　藤原印刷株式会社
＊禁無断転載

■郵送サービス

『Catwalk／ねこあるき』の郵送をご希望の方は、郵送費用分の切手（1号140円）を下記へお送りいただければ送付いたします。その際、お名前・ご住所・何号からご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志３丁目10番１号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の劇場施設などに置いております。

■チケット購入・お問い合わせ

［まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内］
①電話 0263-33-2200（10：00-18：00）
②インターネット https://www.mpac.jp
（要事前会員登録・無料）
③窓口 芸術館１階（10：00-18：00）

［芸術館チケットクラブのご案内］

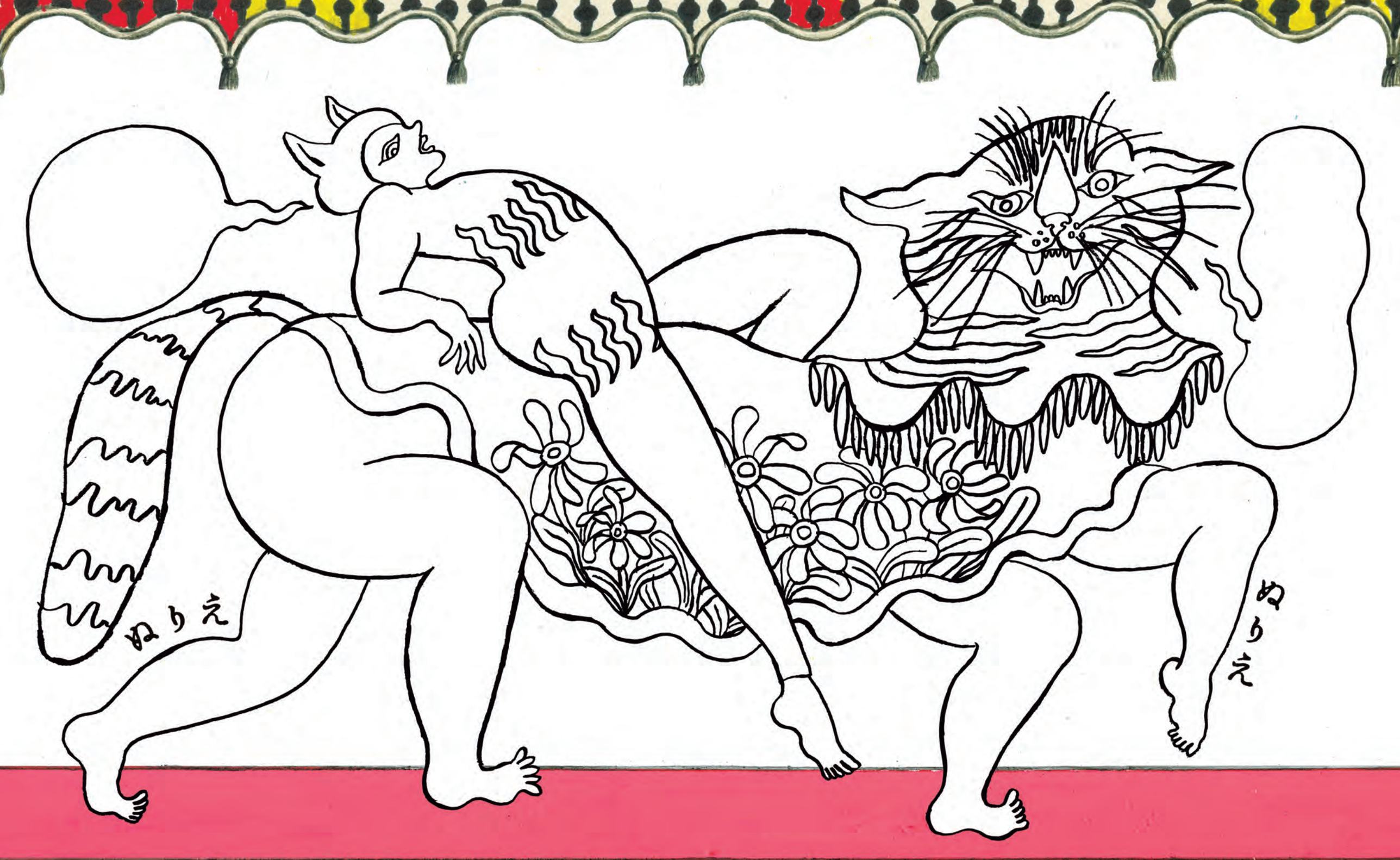
※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。
※インターネット予約が可能（一部公演をのぞく）。
※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。
※ご希望の方には、スケジュールガイド、公演チラシを送付。

■アクセス

【バス】JR松本駅お城口（東口）より、駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

【徒歩】JR松本駅お城口（東口）から「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

※駐車場の用意はございません。
　公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。
※近隣商業施設等への無断駐車は
　他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。



ここは「つづきの劇場」です。役者たちに色とセリフがまだついていません。

続きをかいて劇を完成させてください。完成できたら金メダルシールをもらえます。

Information

公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

SIDE
A
B

チケット発売中

Co.山田うん『ノクターン』

1月13日(土) 14:00
実験劇場

演出・振付・構成・空間デザイン：山田うん
音楽：ヲノサトル
衣装：飯嶋久美子
美術装置：鈴木義明 (f926)

出演：
飯森沙百合　木原浩太　黒田勇　須﨑汐理
田中朝子　西山友貴　仁田晶凱　望月寛斗
山崎眞結　吉﨑裕哉

料金：全席指定 (税込)
一般 ¥3,500／U25 ¥1,000

※未就学児入場不可
※U25チケットは枚数限定、前売のみ。また当日年齢確認証提示。

チケット発売中

『DANDYISM BANQUET II』

1月27日(土) 16:00
主ホール

出演：
古澤 巖 (ヴァイオリン)
山本耕史 (語り・歌)
塩谷 哲 (音楽監督・ピアノ)
小沼ようすけ (ギター)
大儀見 元 (パーカッション)
井上陽介 (ベース)

料金：全席指定 (税込)
一般 ¥6,000／U25 ¥2,000

※未就学児入場不可
※U25チケットは枚数限定、前売のみ。また当日年齢確認証提示。

チケット発売中

芸術館アウトリーチ事業巡回演目
『カメレオンの陽気なキャラバン』

1月14日(日) 11:30／14:30
主ホール・ホワイエ

出演：
武居卓　草光純太　細川貴司　下地尚子　深沢豊
荒井正樹　堀田康平 (以上、シアターランポン)

料金：全席自由 (税込)
一般 ¥2,500／U25 ¥1,000
小学生以下 無料

※3歳以下入場不可
※小学生以下は無料ですがチケットは必要となります。必ず発券してお持ちください。尚、セブンイレブンで発券される場合は手数料がかかりますので、ご了承ください。
※U25チケットは枚数限定、前売のみ。また当日年齢確認証提示。

チケット発売中

二兎社公演47
『パートタイマー・秋子』

2月17日(土) 13:00／18日(日) 13:00
実験劇場

※17日終演後アフタートークあり

作・演出：永井愛
出演：沢口靖子　生瀬勝久
亀田佳明　土井ケイト　吉田ウーロン太　関谷美香子
稲村梓　小川ゲン　田中亨　石森美咲
水野あや　石井愷一

料金：全席指定 (税込)
一般 ¥5,500／U25 ¥3,000

※未就学児入場不可
※U25チケットは枚数限定、前売のみ。また当日年齢確認証提示。

地域にひらく
“「対話」がアート”を生み出す場

マツモトアートセンター

障がいのある人とない人の接点を創るという思いを掲げ、2022年に設立された一般社団法人ナナイロ（中山拓郎代表）。彼らは、『対話アートNAGANO WEEK2022』と銘打って、障がいや生きづらさを抱える人たちによるアート作品の展示、福祉分野で活動する方々によるトークセッションなどを実施しました。そうしたイベントから育まれた「あらゆる違いを持つ人がつながるアートスペースを開きたい」という想いを受けとめ、彫刻家の北澤一伯さんが代表を務める美大・芸大受験予備校「マツモトアートセンター」では活用されていなかった１階のスペースを改修して、一般にもアートスペースとして開放しています。現在は、2023年10月から５カ月にわたるナナイロによる『対話アート：ジャンクション』を開催しています。

北澤さんは「前からアートセンターと名付けた施設を運営している我々はどういう役割ができるのか探求したいと思っていて、ここ２、３年アート展とともに古本市などいろいろな要素を抱き込んでやっていたんです。その経過の中でいろいろなネットワークができたりして、弾みができた。そのタイミングで中山さんがやってきて、直球で、障がいのある人と社会の接点、つながれる場所をつくりたいというお話をいただきました。話を聞きながら理解を深めていく中で、納得をしてじゃあやりましょうということになりました。地域アートに関しては僕自身は器ではない。商店街を盛り上げるみたいな才覚はないなあと思っていたんだけど、近所の飴屋さんやホテルなどにイベントのポスターを貼ってもらったり古本を置いていただいたりしながら交流ができたことで、自分のところにも受け入れ体制ができたんです。

中山さんはベンチャーの才覚があるからいろいろやっていくでしょうけれど、僕は紙に落としたインクが広がるように、深掘りしながら、時おり飛び地もつくったりしながら、ここをひらいていきたい」と語ります。

一方、中山さんは「二つの側面があると思うんです。一つは障がいある人と社会の接点をつくること、もう一つはアートのハードルを下げて地域のいろいろな人が表現者になっていくこと。そうした活動の中で時には障がいある人がインスピレーションを与える側になっていく可能性も生まれてくる。そうすると自然と交流もできていくと思うんです」と言います。それがナナイロの目指す“「対話」がアート”です。また、アートスペースは地域の方々が日常的に表現に触れることのできる場として機能していくとのことで、ナナイロによる展示などの仕掛けもまた、いろいろな表現が出会うきっかけになるはずです。

北澤さん（左）と中山さん

松本市で活動するアーティストが皆さんのお悩みに、
時にユニーク、時に独特すぎるかもしれませんが、とにかく真剣にお答えします

教えて、アーティストさん

［第二回］ 鳩山浩二 Hatoyama Koji

お悩み

８歳児と６歳児の母親です。自分に余裕がないときの叱り方で常々悩んでいます。特に、夕方以降の夕飯・お風呂・明日の準備を経て、いつもの時間に寝かせるまでの“特急オペレーション”の中で、たとえば、歯磨きの仕上げをしてもらう順番をめぐって姉弟で大げんかするとき（しかも毎晩）などに、こちらも余裕がないとイライラして火山を噴火させてしまいます。上の子が歯磨きカレンダーをつくるということで、「仕上げ順番」問題は解決しているのですが、このような余裕がないときに出てしまうイライラの感情を、何かユーモアでやり過ごすよい方法はないでしょうか。

答え

毎日お疲れ様です。独身男性ではありますが、過去に息子だった経験上、世間の親の皆様には尊敬しかありません。歯磨きの仕上げ、懐かしいなぁ。 年中無休の育児、噴火しちゃうこともありますよね。やり過ごす方法を３ステップで考えてみました。

①イライラに名前をつける

名前をつけることで感情との間に距離ができ、飲み込まれにくくなります。 かわいい名前がよし。例えば「イライラちゃん」のように、ちゃん付けするだけでも感情に深刻さがなくなるはず。

②テーマソングをつくり、口ずさむ

ほんの一節、好きな曲の替え歌でかまいません。イライラを、怒りではなく歌に変換しちゃうのです。叱るにしても、メロディ付きで叱るのはいかがでしょう？　子供の好きなメロディを使えば、だいぶ後味も違うはず。

③大きい声で歌う

大声は最強の精神衛生法です。体験上断言できますが、15分前後大声を出し続ければ、どんなイライラもきれいに消えます。呼吸が深まり頭は冴え、心身に活力が湧いてきます。もしこれを普段からの習慣にできれば、毎日はエネルギーに満ち、感情が爆発する機会も自ずと減っていくことでしょう。住環境が許すならぜひお試しください。

相談者様の幸せを応援しています。

シンガー、ソングライター、ギタリスト。東京で15年ほど音楽活動を続けたのち、2021年、憧れだった松本へ移住。市内give me little moreやゲストハウス東家などで演奏活動を行っている。唯一無二の弾き語りスタイルは、一度見たら忘れられない。

「教えて、アーティストさん」では、皆さんのお悩みをお待ちしています。
恋愛や仕事、人生についてなどなどなんでもお寄せください。必ずしも採用されませんが、その時はごめんなさい。
宛先：〒390-0815 松本市深志3-10-1 まつもと市民芸術館「教えて、アーティストさん」係

マツモト建築芸術祭×芸術館

文化芸術が街を輝かせる　第二回

マツモト建築芸術祭総合プロデューサー
おおうちおさむさん

「文化芸術が街を輝かせる」連載の第２弾は、マツモト建築芸術祭の総合プロデューサー・おおうちおさむさんにご登場いただきました。おおうちさんは、2022年に“名建築にアートが住み着くマツモトの冬。”をテーマに、さまざまな建築物に設置されたアートをめぐる芸術祭を初開催。アートを介した出会いによって空き家が活用されるなど、新たな価値観を生んでみせた。

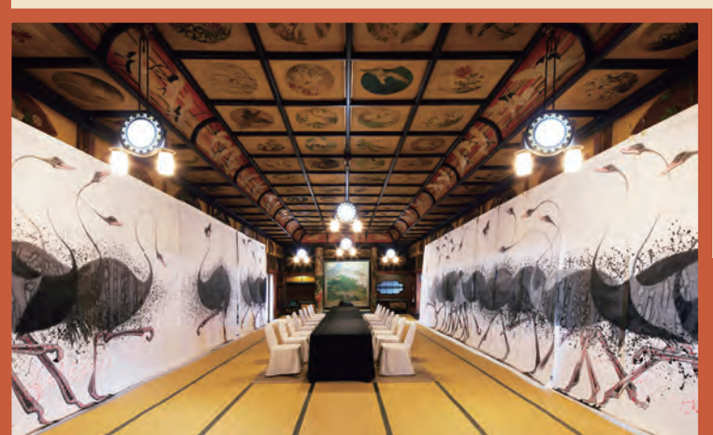
――マツモト建築芸術祭を実施した経緯を教えてください。

僕は京都の町屋をめぐりながら写真展を楽しむ「KYOTOGRAPHIE international photography festival」に初回から関わっているのですが、ここで芸術祭をどうつくるか、人にどう情報をキャッチして興味を持ってもらうかのノウハウを培いました。この経験こそが建築芸術祭を思いついたきっかけなんです。地域に芸術祭があふれる現代、しかしその手法、狙いはほぼ同じ。松本市美術館のロゴをつくるなど縁のあった松本でまったく違うことをやりたいと思い、ならば仕組みではなく、考え方を変えようと思ったんです。僕はアートディレクターであり、デザイナー。仕事で多くのアートにリーチしてきましたが、アーティストの本質をわかっていないとデザインは生み出せない。そこを強く引っ張り出せば新しい価値観を生み出せると思ったのです。こんなことを言うと怒られてしまいますが、キュレーターという仕事は多くの場合テーマを設定し、アートを選んで、横串を通すことで表現の幅を広げています。それも素敵な方法論なのですが、自由度の高いものに蓋をしてしまう可能性もあると感じます。また多くの芸術祭は地域の特性を生かす、地域にちなんだテーマを設けるなどしますが、わざわざそれをアートを使って改めて発信することに意味があるの？とも思っていました。ポテンシャルがある街が次のステージに向かうにはそれまでの財産を見直すことではなく、まったく違う要素とぶつかる化学変化が重要だと思うんです。建築芸術祭は僕が好きなアートを好きな建物の中にぶち込みたい、それが唯一最大の動機なんです。

アートによって建物の雰囲気が変わる、建物によってアートの見え方が変わる

――建物を活用するというコンセプトはどこから生まれた？

松本の建築は建築雑誌に取り上げられるような物はあまりないけれど、時代も幅広く、素晴らしいものがたくさんあります。それを周遊するだけでも面白いのですが、その動機付けにアートがあったらと。アート作品を一つプロットすることで、その建築の見え方も空気感も変わって見えるからで、それがアートにとっての正しい役割だと思うんです。



マツモト建築芸術祭2023
アーティスト名：福井江太郎
会場名：割烹 松本館
（国登録有形文化財・
松本市近代遺産）
Photo:Kazumi Kiuchi

また松本には古くからの建物が残っている素敵さと、残ってしまっている怖さがあると感じました。戦後、人間の営みは大きく変わりました。古い建物は現代人が生活するのにマッチせず、使い方がわからないために放置されたり駐車場になっている。でも使い勝手の良さではなく、存在の素敵さを担保するような暮らし方をすれば十分に役に立つ。建物にアート作品を入れることで、所有者さえ信じられない気づき、現象が起きるんです。逆に白い空間に飾られることを是とするアート作品も、あばら家や廃業したお店、和風の座敷に置かれることで新たな魅力を放つ。そういう相乗効果が人を感動させるし、建物を見慣れている地元の人が何より楽しいと思うんです。地元の人がハッピーであれば他所からも人が来ます。

――空き家をなんとかしたいという思いは最初からあったんですか？

そこまで読んではいません。とにかく歩き回って、「いいな」と思った建物を端からノックしました。松本城のそばの宮島肉店も建物がかわいらしかったから使いたかった。実は建築芸術祭の後、僕が仕事場にお借りする予定だったんです。ところが展示を見た男性がここでお店をやりたいと、めちゃくちゃ熱いメールを何通もくれた。今では素敵なお菓子屋になっています。みんなで一生懸命に掃除した空き家のいくつかも、引き続き使ってもらっている。これはとてもうれしいことですね。

――2024年の冬はどんな仕掛けですか？

一昨年、昨年と連続して開催した理由は、作品が変わるだけで建物の雰囲気が変わる、建物が変わるだけで作品の見え方が変わることを紹介したかったから。でも今回は、考え方を変えて実施します。松本城の敷地にある旧博物館の建物が来春に壊されるのですが、ここを丸ごと使って開催する予定です。無くなってしまう建物ですが、記憶と感謝を残すことで、今まで以上に素敵なものとして担保されるような内容にしたいと思っています。

――芸術館の建物も細い柱が建築的には面白いそうです。

来年度の芸術監督団が発表されたのと同じタイミングで、実は僕も松本市立博物館のアソシエイトプロデューサーに就任しました。芸術館さんの協力で松本市立博物館では『サムライたちの職員会議』を上演しましたし、芸術館を設計した伊東豊雄さんともマツモト建築芸術祭のシンポジウムもやらせていただきました。次期芸術監督団の皆さんが掲げた「ひらいていく」のコンセプトにはとても共感します。そうそう、『サムライたち～』に出演された役者さんたちが、ビルのフロアを劇場として開かれましたよね。例えば空き家一つとっても、行政の仕組みではできなくても、文化芸術を介することで「ひらく」ことができるときがある。まずは皆さんと出会い、その先に何ができるか考えるのはとても楽しみです。

MATSUMOTO ARCHITECTURE + ART FESTIVAL × MPAC

石丸　ところでこういう調度品が置かれた空間、日本風情の佇まいの建物は特に外国からの皆さんは惹かれるのではないですか？

女将　クラリネット奏者のカール・ライスターさんなど毎年ドイツのワインを持ってきて、毎日のようにきてくださいました。体が大きくていらっしゃるから、私どもで両国まで行ってお相撲さんのような浴衣をしつらえました。それでお仲間の管楽器奏者の皆さんと演奏もしてくださいました。

石丸　いろいろな皆さんが音楽をやりたい場所になっているのですね。素晴らしい。

女将　息子の関係でピアニストの青島広志さんも何年もここで演奏してくださっています。今年はいつやろうかと電話をくださるのが恒例になっています。

お宿やお店などご商売されている方にも芸術館の催しを見られる工夫を考えたい

石丸　僕たちは芸術監督団として、串田さん、小澤さんが走ってきた非常に大切なレールを受け継いで来年度から活動させていただきます。例えば松本にはいろいろな観光名所がありますが、浅間温泉など温泉街の方たちとも活気ある交流をすることを考えたいと思っているんです。お話を伺っていて、僕たちが積極的に皆さんのもとに訪ねていく、これが大事だと改めて感じました。

女将　それはうれしいです。ぜひ、石丸さんにもここで歌っていただきたいです。

石丸　ありがとうございます。そういう交流もどんどん、お互いにやり合うといいですよね。そして演奏会や演劇を楽しんでいただいたお客様にお風呂に入っていただく、お宿に泊まって、おいしいご飯を味わっていただく、そんな最高の１日に彩りを添えられればと思います。

女将　そういう魅力と浅間温泉がどうやってつながるのか、チラシを置くところから始めて、私たちも何か考えなくちゃいけませんね。

石丸　松本の方々はホールでやっている催しのことをすごくご存じで、「今日から何々をやっているよね」なんてよくお声がけしてくださいます。

女将　そういう話題を日常にしたいですよね、市民の皆さんと。素晴らしい演目ばかりやられているので、一度でも出かければきっと病みつきになります。

石丸　ご商売されていらっしゃると、お客様がいらっしゃる時間帯と重なるからなかなかホールの催しはご覧になれないですよね。でもお宿やお店を経営していらっしゃる方にも僕らの舞台をぜひ観ていただきたい。僕らの方で開演時間を工夫するなど、なにか方法を考えたいと思います。そういうイベントを体験していただく、感じていただくことができれば、より関係性も深まるじゃないですか。松本にはいろいろな魅力があります。僕ら芸術監督団の仕事の一つは、一つ一つの魅力を文化芸術によって線につなぐことだと思うんです。

MEET & TALK with "Matsumoto"

令和6年度から活動を開始する芸術監督団が代わる代わる街に飛び出していく企画の第2弾は石丸幹二参与（次期ゼネラルアートアドバイザー）が、“城下町松本の奥座敷”と言われる浅間温泉の「本棟造りの宿 菊之湯」を訪ね、女将（おかみ）・中條みほ子さんと対談させていただきました。磨きぬかれたケヤキの大黒柱や太い梁が交差する吹き抜け、松本の民芸家具やアンティークの調度品が配置されたロビーに、石丸参与も魅せられた様子でした。

石丸　僕はセイジ・オザワ 松本フェスティバル（OMF）で『兵士の物語』に出演させていただいたときに、前まつもと市民芸術館総監督の串田和美さんから「菊之湯さんに行ってみたら」と勧められ、バレエダンサーの首藤康之さんとお邪魔したことがあります。フェスティバルに出演するアーティストは入浴パスをいただけて、お客様がいらっしゃる前にお湯に入れてもらえる特典があるんです。今日は２度目の菊之湯さん！

女将　あのときは私もおりました。今回、素晴らしい方々が、まつもと市民芸術館の芸術監督団になられると聞いて大喜びしております。

石丸　再会になるわけですね、ありがとうございます。あれ以来、僕も、浅間温泉のお風呂が素敵だよと、お客様の誘いになっているかどうかは分かりませんが、仲間には自慢話のようにしていたのです。だから、ぜひともお話をうかがいたいと思っていました。浅間温泉がいつぐらいに開かれ、松本市街地とどんな関係だったのかに興味があって。

女将　ありがとうございます。この辺りは昔、本郷村（明治22年に誕生し、昭和49年に松本市と合併）と言われ、善光寺街道の道中で一番にぎわっていたらしいのです。菊之湯を創業したのは私の曾祖母で、彼女は離婚し、一人息子を抱えて髪結でもやろうとこの地にやってきました。その当時は芸者衆が100人以上もいたそうです。

石丸　そうなんですか。芸者さんがいらっしゃったということは、お酒を呑めるお店も当然あったりと、かなりのにぎわいだったのですね。

女将　ええ。江戸時代に、松本城を建てた初代松本藩主の石川数正さんが「御殿湯」（今の湯々庵 枇杷の湯）をつくって足繁く通うなど、お風呂屋さんが多かったようです。歴史を研究されている方がこのあたりには何人もいらっしゃるのですが、旅館ができてきたのは明治初期という説もあれば、それ以前からという説もあって、正確なことは……。ただ明治に入ってだんだん旅館、旅籠が増えたのは確かで、その流れの中で菊之湯も創業されました。明治24年のことです。まだ若い娘だった曾祖母は、ここともう１軒の旅館をつくったようです。

石丸　へえ、すごいですね。

女将　浅間温泉の記述は日本書紀にも出てきますし、天武天皇の時代の古墳がたくさん残っていたりで、古くから開かれた地だったのが分かります。

石丸　そんなに古くからにぎわっていたのですね。すごいなぁ。こちらの温泉はどういう質なのでしょう？

女将　筑摩（束間）の湯といって単純泉です。硫黄の匂いはかすかにしますけれど、アルカリ性の綺麗なお湯ですよ。

石丸　だから女将さんもお肌がつやつやでいらっしゃる……

女将　いえいえ、私は幼いころ以外はここのお風呂には入ったことはないのです。お客様のための大事なお湯で、夜遅くもお客様が入っていらっしゃいますから。

石丸　それほど大切にされているもの、まさに宝なのですね。

菊之湯のコンサートは若い演奏家に場を提供するため

石丸　菊之湯さんでは時折コンサートを開かれていらっしゃるんですよね？　このロビーだったら音が染み渡って素敵だろうなぁ。

女将　本当にいい雰囲気ですよ。小さい空間なので60名程度のサロン風のコンサートですが、音が素敵に広がって。ロビーのピアノは、私が女将になって、息子の面倒を見るために自宅からここに持ってきたものです。

石丸　そうだ、息子さんはフルート奏者でいらっしゃるのですよね？

女将　はい。本当はお料理の勉強をさせて後継ぎにと思っていたのですが、サイトウ・キネン・フェスティバル松本がきっかけで音楽の道に進みました。今は運が良くて群馬交響楽団で頑張っております。それで菊之湯は後継ぎがいないものですから、本当に探しているんですよ。ぜひどなたかご紹介ください。

石丸　え、それは大変じゃないですか。いい後継ぎが現れるといいですね。それにしても息子さんは群響の所属ですか、すごくいいオーケストラですよね。

女将　群馬県の小学校から高校までのすべてに演奏を届けて回っています。県内では上田市のサントミューゼで毎年のようにコンサートをやっています。ここ（菊之湯）でのロビーコンサートは、息子もそうですが、大学生、音楽大学を出てもまだ仕事がない人など、若い演奏家に場を提供する意味で始めました。

石丸　それは素晴らしいですね。

女将　近所の方たちがクッキーをつくってくださったり、喫茶店の方がコーヒーを淹れてくださったり、お手伝いもしてくださって。お客様には1,000円ほどちょうだいし、コンサートの後にお風呂に入っていただきます。そのお代を若い人たちに演奏料として渡すわけです。

石丸　ますます素晴らしい取り組みですね。

中條みほ子　Nakajyo Mihoko

ご自身も東京で音楽を学ぶが、先代のころ旅館業を手伝うために帰郷を決意。現在五代目経営者、四代目女将として奮闘。

芸術監督団の仕事の一つは文化芸術を通して街の魅力を点から線につなぐこと

女将　ありがとうございます。ここのロビーコンサートは応援したいというお客様の気持ちが伝わるのですね。若い演奏家にはそれを感じて帰ってもらって、一生懸命に勉強して、いつかまたここに戻ってきてねという思いでやっています。

石丸　OMFもあるし、松本市音楽文化ホールもあるし、松本は、音楽と暮らしがすごく近い街ですよね。

女将　音楽がとても好きで掘り下げるような人が多いかもしれません。適当にではなく、しっかり聴きたい、極めたいというか。

石丸　それが松本の皆さんの気質ですか？

女将　もう皆さん何においても勉強熱心ですよ。

実は私どももどういった縁をいただいたのか、最初のころ、サイトウ・キネン・フェスティバル 松本のレセプションを菊之湯でやらせていただきましてね。ですから石丸さんが先ほどおっしゃったように、フェスティバルに出演されている、すごい演奏家の方々がお風呂に入りにきてくださるのです。そんな皆さんがPRしてくださるおかげで、後から聞いてびっくりするような方も泊まりにいらしてくださっています。

石丸幹二　Ishimaru kanji

東京音楽大学音楽学部器楽科にてサックス、東京藝術大学音楽学部で声楽を学ぶ。東京藝大在学中の1990年、劇団四季にて、ミュージカル『オペラ座の怪人』ラウル・シャニュイ子爵役でデビュー。『美女と野獣』『壁抜け男』などに主演、看板俳優として活躍（2007年退団）。その後は『ジキル＆ハイド』『ハリー・ポッターと呪いの子』『蜘蛛女のキス』などの舞台に主演するほか、映像では、大河ドラマ「青天を衝け」、同「花燃ゆ」、「相棒」、「ライオンのおやつ」など、映画「シング・フォー・ミー・ライル」（吹替）、「太陽とボレロ」、「アキラとあきら」などに出演。また「題名のない音楽会」「健康カプセル！ゲンキの時間」の司会を務めている。音楽では、アルバムのリリースほか、オーケストラコンサート、ジャズクラブライブ、ディナーショーなど多彩に活動している。まつもと市民芸術館では『空中キャバレー』『兵士の物語』に出演。

松本の

伝統の心

に触れる

「手」はその人の人生を表すと言われます。粛粛と手仕事を重ねてきた職人さんの手には、よりそのことを感じます。これを「掌」と表記すると、「たなごころ」と読むように、職人さんの心が手に宿って見えませんか。

い

ナワテ通りにある矢澤鯛焼店の千野恵利子さんは御神酒の口（国の選択無形民俗文化財に指定）を手がけて35年。代々つくり続けてきたお家で、毎年12月25日～30日の期間はお店で販売しています。「他の地域にもあるけれど、松本のものは細くて繊細」と語る千野さん、素早く繊細に編み上げられる様子がアートのようでもあります。

ろ

約400年前に始まった新春の伝統行事「あめ市」が今も続く松本には、最盛期は20軒以上もの飴屋がありました。寛文12年創業の山屋御飴所さんは松本最古の老舗。飴づくりは４人による手作業です。熱々の飴が固まらぬうちに代表の太田喜久さんが一気に伸ばし、専用器具でカット、トレイに並べてと皆さんが奏でるリズムが心地よいのです。

は

松本だるまの製造は、市内では布野恵だるま店と丸栄福だるま製造所のみ。両社は親戚でお祖父さんが戦後つくっていたそう。それを復刻する際、後発だった丸栄の布野昭一さんは、古くからの「繭玉型」に挑戦。仕上げの金を入れながら「お客様が幸せを願って買ってくださる縁起物。私もお客様の幸せを思い、つくっています」とおっしゃいました。

引ネキ飴を伸ばす山屋御飴所の太田喜久さん

御神酒の口を繊細に編み上げる千野恵利子さん

松本だるまに金を入れる丸栄福だるま製造所の布野昭一さん

松本の

伝統の品々

に触れる

松本のお正月には、この地域独特の伝統的な品々があるのをご存知でしょうか？　その中から３つの縁起物を紹介いたします。

Photo : Yuki Yokosawa

い　御神酒の口

神棚などに供える御神酒徳利に挿して飾る竹細工です。江戸時代の末から松本藩の下級武士の内職として制作され始めたと言われています。今も四柱神社の歳の市で売られています。マダケを細く裂いてヒゴ状にしたものを、竹のしなやかさを生かしながら曲げて絡ませて編んでいきます。写真は三階松梅付。

ろ　引ネキ飴

引ネキ飴は、その名の通り大きな塊から引き出して、伸ばして、のしてつくる飴です。サクサクとした食感とフワッとした口溶けは、板のような見た目からは想像できない、繊細な味わいだと人気です。中双糖、水飴、そして沖縄多良間産の上質な黒糖が原料。11月から５月の乾燥期限定生産なのでご注意を。

は　松本だるま

養蚕のお守りとして、お蚕様の豊作を表した『大當』（大当たり）の文字を入れ、江戸時代からつくられていた松本だるま。繭を形どったゲジゲジの眉毛とヒゲを付けたユニークな表情が特徴です。松本では、願い事の成就を託して、右目に黒目、左目に「叶」の一文字を入れ飾る風習があります。

引ネキ飴

ろ

御神酒の口

い

松本だるま

は

「あがたの森」の雪景色

小学生の頃、あがたの森公園から徒歩30秒のところに住んでいた。毎日のようにこの公園で遊んでいたと思う。通路脇や丘の斜面にもりもり植え込まれたドウダンツツジの中は、子どもにとってちょうど良いトンネルのようで、その中を秘密基地にしていた。

あがたの森といえば、大きなヒマラヤ杉。「ヒマラヤ杉」はスギと呼ぶのに実際はマツ科の木だ。季節になると薔薇の形の松ぼっくり、シダーローズが落ちてくる。旧制松本高等学校２代目の校長で植物学者の大渡忠太郎が植えたもの。正面に建つあの青緑色の建物は、かつて校舎として使われていた。

この機会にと、初めて「旧制高等学校記念館」に入ってみた。学校設立当初のこの辺りの写真を見ると、まだヒマラヤ杉は小さかったため校舎の背後に山がよく見えて新鮮な景色だった。今よりずっと殺風景でも活気があったのかもしれない。現在、駅を背にして一番奥にある駐車場のところに学生寮があって、校舎に向かってまっすぐの道を歩いてくるバンカラなマント姿の学生達を想像する。

記念館の中は３階まで展示があった。昭和初期に生まれて活躍した日本人の多くが旧制高校での生活を経験しており、彼らの学生時代の雰囲気を知れて面白い。一方で「高等学校」と謳われる場所で学生としての女性が一人も出てこないことに、何度も違和感を持つのだった。それだけ「今」が変わったのだから素晴らしい。けれど今はその過去から地続きで、その頃からまだ100年も経っていないことについてよく考える。

後で調べてみたところ、1948年、旧制松本高校の第30回生として最初で最後の女生徒が一名在籍したという記載を本に見つけた。山口さんというその女性は凛としていて聡明でクラスの人気者だったそうだ。この方が当時のことを書いた文章を読んだら、私もファンになりそうだった。ただ、戦後すぐに旧制高校が廃止になったことで、この年の学生達は卒業が叶わなかったのだという。

大きなヒマラヤ杉が雪をかぶった様子はいかにも冬らしい良い景色。私がこれを書いている今はまだ晩秋だけど、しんしんとした雪の風景を思い出しながら絵を描いてみます。

Illutration & Text

otama

太田真紀／イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年4月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。otama-ki.com

[特集]
旧き良き心・松本の初春

vol.
02
2024
Winter

ねこまつり

ぬりえもあるよ

まつもと市民芸術館の
あたらしい
広報誌
第2号
TAKE FREE

まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre